

社会科学学習指導案（公民的分野）

平成30年11月16日金曜日
鹿児島玉龍中学校3年C組
男子20名 女子19名
計39名
指導者 教諭 上白石 修

1 単元名 「地方自治と私たち」 —鹿児島市の持続可能な活性化対策を考える—

2 単元の考察

本単元は、教科書第3章にあたる大項目「現代の民主政治と社会」の終末にあたる。これまでに大単元として学習してきた「現代社会と私たちの生活」「個人の尊重と日本国憲法」を受け、政治分野のまとめとして位置づけられている。本単元に関して学習指導要領では、「地方自治の基本的な考え方について理解させる。」とし、地方公共団体の政治の仕組みについて理解させるとともに、住民の権利と義務の理解を通して、「地方自治の発展に寄与しようとする住民としての自治意識の基礎を育てる。」としている。またその取り扱いについては、「調査や見学などを通して具体的に理解させる。」としている。

鹿児島市は、本県の中央部に位置し、世界ジオパーク認定を目指す桜島や錦江湾に代表される豊かな自然、「明治日本の産業革命遺産」の構成遺産としての旧集成館等、個性あふれる歴史・文化を有している。人口60万の市民生活を支え、来訪者を楽しませる多様な都市機能が集積する南九州の中核都市として発展している。一方、市内の細部に目を向けると、少子高齢の進行や人口減少局面への移行、グローバル化、環境問題など、これまで経験したことのない変化が急激に進み、大きな転換期を迎えている。

このような変化に的確に対応し、将来に向けて持続可能な発展を遂げていくため、平成33年（2021年）度为目标年度とする「第五次鹿児島市総合計画」が策定され、平成24年度より様々な取組がなされている。この計画は、市民と行政がともに考え、ともに行動する協働・連携のまちづくりの計画であり、「人・まち・みどり みんなで創る“豊かさ”実感都市・かごしま」を目指す都市像として掲げている。

政府（総務省）も平成5年（1993年）の「地方分権決議」以来、いわゆる「平成の大合併」など地方自治体の制度改革を推し進めている。その評価については、賛否両論があり、政府主導で行った結果、多くの課題がクローズアップされているのも事実である。

総務省が行った人口減少や労働力減少の推計によれば、2050年の地方自治体では、約40%もの高齢化率や単独世帯（とりわけ高齢単独世帯）の増加による、社会福祉をはじめとする行政サービスの脆弱化や労働力人口の約35%もの減少による、人材の希少化が顕在化するとされている。本市においてもこのような傾向は確実に現れ、大きな課題となることは必至である。

本市は、前述の総合計画の中で、2020年に予定されている「国民体育大会」に向けて市街区の開発が急ピッチで進められている。九州新幹線の終着駅である鹿児島中央駅や県下随一の繁華街である天文館では、大型商業施設とマンションを併設した高層ビルの建築が進んでおり、市民だけでなく来訪者にも魅力ある都市づくりが行われている。一方で、周辺には過疎地域も存在し、中心部においても老朽化した公営の集合団地などでは、空き屋問題等の課題も顕在化している。このような現状は、市内全域から集まる本校の生徒にも実感として伝わっているようである。過疎、高齢や戸建ての住宅団地での子どもの減少、マンションでの生活で経験する住みにくさなど、生活環境の違いがあるからこそ、地方自治の課題が日常的に学級内で話題となっている。

生徒数360人程の本校は、県内初の市立の併設型中高一貫教育校である。入学にあたっては、適性検査が実施されることもあり、総じて基礎学力が定着しており、学びへの高い意識や向上心がある生徒が多い。また、市内全域から登校しているため、遠方の場合、公共交通機関を利用して1時間以上かかる生徒も2割程度いる。保護者の教育に関する意識も高く、学びの環境としては恵まれた状況にあると言える。

本学級の生徒は、社会科への関心が高く、授業中の集中力もある。特に調べ学習では、コンピュータ等を活用したリサーチや資料作成等において高いスキルを持つ生徒が多い。また、社会的な事象に関心を持つ生徒も多く、思考力も高く、学年の Opiniオンリーダ ー的な存在として授業でも核となって活動している生徒が見られる。

本校の大きな特色の一つとして、地域を主題とした産業の特色や歴史的、地理的な課題を追究すべく、フィールドワークを通じた体験的な学習が行われている。総合的な学習の時間の大きな柱として位置づ

けられている「自主研修」では、生徒が少人数のグループを単位として、自ら訪問する施設や企業、大学等を事前調査し、その計画をもとに、1年生では「市内・県内自主研修」、2年生では「九州（福岡）自主研修」、3年生では「修学旅行（関東自主研修）」を実施している。体験活動としてのフィールドワークは、質、量共に充実しており、学びの幅も大きく広がっている。学習内容から考えても、社会科との連携は必須で、事前活動の一環としての調査活動や、事後活動としての振り返り等をフィールドワークの内容と結びつけながら行っている。

また、社会科の授業では、日常的にIWB（インタラクティブ・ホワイトボード）やタブレット等のICTを活用した学習活動を行っている。特に、調査活動だけでなく国内や海外との遠隔共同学習などにも取り組み、コンピュータを介した「人」との交流を通して、社会認識を高める学びを行っており、成果が上がっている。また、地理的分野では、2年次に中国・四国地方で学習する、過疎・過密問題において、あえて鹿児島県鹿屋市の「柳谷地区（通称：やねだん）」の地域再生の取り組みを学習し、行政の支援にできるだけ頼らない、地域の人材や資源を活用した持続可能な地域づくりについて学んでいる。

これまでも多くの討論や議論の場を授業の中に取り入れることで、主体的で対話的な学びを構築してきた。今年度に入り、3人のグループを基本に13班を構成し、各班に学習リーダーをおいて、日常的に活用している。活動の内容としてはワークシートの基本用語の確認作業や重要事項のメモの共有から議論を深めたり、討論題を追究したりする場としている。3人という、議論の場としては最少人数で構成したことで、すべての生徒が主体的に議論に参加できるようになっている。論題や学習の状況に応じて、2つのグループを合体させ、6人で討論するなど、柔軟な対応も行っている。

地域と世界の結びつきについては、前述の通り、これまでの遠隔共同学習の経験を踏まえつつ、授業者の人的資源を活用して、メキシコとの交流をすすめている。メキシコは、1980年代の大気汚染や地震の影響で都市生活に支障をきたし、海外からの支援を受け入れていた。その中で日本の支援も行われており、現在も日本製のトロリーバスが走行するなど、日本人による様々な支援が展開されている。そこで、授業者が日本人学校在籍時代に、メキシコと日本の地域開発について議論した、メキシコの大学講師をゲストティーチャーに迎え、彼の研究分野であるサステイナブル研究者としての知見を生徒との議論の中で活かしていきながら、遠い中米の国との関連性にも目を向けさせたい。

本単元では、地方の政治に関する基礎的な学習を導入で十分に理解させた上で、現代の緊急課題ともいえる「地域の活性化」について持続可能な町づくりを視点において学習活動を展開していきたい。その中で、単に現在進めている市街地の活性化プランのみを具体的に取り扱うのではなく、生徒が日常生活の中で実感している地域の課題を、彼らなりの目線で捉えると共に、現在だけでなく、20年後、30年後、50年後に住みたくなる地域をテーマに、持続可能な地域社会づくりについて、生徒なりの言葉で表現していくことを目的として位置づけていきたい。また、財政の視点においても、補助金を目当てとした改革案ではなく、あくまで自治的、自発的な活動や提案においてできる地域の活性化プランを考えさせていきたい。また、行政への依頼という視点だけでなく、自らの問題として捉えさせ、提案する相手を想定しながら具体的な活動に結び付けたいと考えている。そのために、政治分野と連携しながら、マニフェスト等を参考に政党や身近な公民館への働きかけなどもすすめていこうと考えている。

3 単元目標

(1) 上位目標行動

地方自治に関する基礎的な知識を活かし、地方自治体をめぐるさまざまな課題に目を向け、それらの課題の解決を目指して、自らがどう地方の政治に働きかけるべきかについて考えや意見を持つことができる。

(2) 下位目標行動

- ① 市の広報誌やホームページ上の情報等を参考にしながら、地方自治の意味を知り、地方議会と首長の役割を中心に地方自治のしくみを理解する。
- ② インターネット等を活用し、地方財政や住民参加の方法について理解する。
- ③ 「持続可能な町づくり」を念頭に置き、身近な問題の解決策について自分なりの考えを持つ。
- ④ いくつかのテーマ毎に分かれて「地域の活性化プラン」を検討し、地域再生や持続可能な社会作りの専門家との交流の中で、具体案をまとめていく。
- ⑤ 「活性化プラン」についての意見交換をし、自らのアイディアをどのような対象（公民館や政党など）に提案すべきか考え、実際に意見書を提出する。

4 単元の具体的な評価規準

以下の表は、単元全体の評価規準をもとに、各時間に特に重点を置く観点別の規準をまとめたものである。信頼性の高い絶対評価を行っていくために、生徒に単元や各時間の初めに本時の重点を置くべき観点を明確に示すようにしている。本来、4つの観点すべてを扱うべきであるが、観察や自己評価は2つの観点が限界であると考え、各時間の重点となる規準を以下のようにまとめた。

尚、この表中の横軸のローマ数字と各時間内の数字の組み合わせは、「単元の評価計画」中の「具体的な評価の方法」の項目と対応している。

	I 社会的事象への関心・意欲・態度	II 社会的な思考・判断・表現	III 資料活用 of 技能	IV 社会的事象についての知識・理解
単元 の 評 価 規 準	・現代日本の政治は、中央の政治と地方の政治（地方自治）に分類できることに着目し、身近な地域の特色ある政治に関心を持って、すすんで調べたり、住民の一人として行動のあり方や提案すべき内容について意欲的に考えたりしようとしている。	・具体的な事例をもとに、地方自治が代表民主制を原則としながらも直接民主制の手法を導入している理由について多面的・多角的に考察している。 ・町づくりの課題ないし現代政治全体の課題について、調査結果を発表したり、討論を行ったり、提言をまとめたりするなどの様々な表現活動に取り組み、学習の成果を発信しようとしている。	・鹿児島市の地方自治に関する資料を活用して、鹿児島市の特徴や課題を把握しようとしている。 ・鹿児島市の再開発計画の様子を調査し、その概要をつかもうとしている。	・地方自治のしくみを首長と議会との関係を中心に理解し、その知識を身につけている。 ・具体的な事例を通して地方分権の動きや特色ある町づくりの重要性に気づくとともに、現代日本の政治の課題を解決するためには、国民が政治に関心を持つとともに国民の積極的な政治参加が求められていることを理解している。
第一次	①地方の政治に関心を持ち、地方自治の根本は住民自治と団体自治であることに気づいている。			②具体的な事例を手がかりに、地方自治のしくみや地方議会と首長の役割を理解している。
第二次			③身近な生活とのかかわりの中で、地方分権の重要性について調べ、まとめている。	④地方財政と住民の政治参加の方法について、そのあらましを理解している。
第三次		⑤「持続可能な町づくり」に関する自分なりの考えをまとめ、わかりやすく表現している。	⑥「鹿児島市総合計画」の現状をつかみ、その内容を資料から読み取ろうとしている。	
第四次 (本時)	⑦自ら設定した「町づくり」について、意欲的に専門家と交流し、プランの練り上げをしようとしている。	⑧「持続可能な町づくり」について多様な考えに触れ、自らの考えを練り上げ、具体的に表現しようとしている。		
第五次		⑨学習を振り返り、具体案をもとに、自らと政治とのかかわりについて、多面的・多角的に考察している。		⑩既習事項や新聞記事などを手がかりに、現代社会の課題にはどのようなものがあるかを理解している。

5 単元の指導計画および評価計画（全5時間）

＜評価の方法内の数字は「4 単元の具体的な評価規準」の表と対応＞

時	題	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	具体的な評価の方法
1	地方の政治と自治	・ ポストテストによって前時までの学習内容を確認する。単元の流れを確認する。 ・ 市の広報誌を見て、地方自治の意味に関心を持つ。 ・ 地方議会と首長の役割について説明を聞く。	・ 前時までの定着状況を知り、形成評価に役立てる。 ・ 地方自治の課題を振り返り、活性化について追究することを知らせる。 ・ 国会・内閣との関連から議決機関や執行機関を捉えさせる。	（Ⅰ-①） 広報誌などの活用の状況を観察する。 （Ⅳ-②） ワークシートへの書き込み状況を確認する。
2	地方の政治と住民参加	・ 地方分権の意味を資料から読み取る。 ・ インターネット（総務省）で地方分権一括法に触れ、地方分権の動きをつかむ。 ・ 地方財政と住民自治について説明を聞く。	・ 中央集権的な体制の課題との比較を通して理解させる。 ・ 地方分権一括法の読み込みでなく、意義に注目させる。 ・ 「三割自治」について具体的な資料をもとに理解させる。 ・ NPOの活動を紹介する。	（Ⅲ-③） グループ討議で身近な問題を発表させる。 （Ⅳ-④） ワークシートへの書き込みやメモの状況を確認する。
3	持続可能な町づくりを考える	・ 自分にとっての魅力ある「住み熟せる」町とはどんなところか、考える。 ・ 自らの指向と合致するカテゴリーを選び、議論を深める。 ・ 議論を通じて、具体策を考え、その提案先も検討する。	・ 持続可能な町づくりを「住み熟し」と捉え、どんな町なのかを考え、現状との違いを述べさせる。 ・ 生徒の意見をもとにカテゴリー分けし、グループで討議させる。 ・ 提案先として、政党や公民館など既習内容と関連づけさせる。	（Ⅱ-⑤） グループの協議の様子を記録から読み取る。 （Ⅲ-⑥） 「総合計画」の読み取りの状況を観察する。
4 （本時）	テーマに応じたプランづくり	・ 前時までのプランの内容をグループで再確認する。 ・ 専門家への質問を行い、プランの改善案を整理する。 ・ 自分のグループに戻り、専門家からのアドバイスをプランに反映させる。 ・ プランの練り上げを行う。	・ 専門家との交流を意識させながら、プランの課題を整理させる。 ・ TV会議を使い、専門家との意見交換を行わせる。 ・ プランへの反映に苦慮しているグループを支援する。 ・ 活動が停滞しているグループを支援する。	（Ⅰ-⑦） 発表や交流活動への参加状況を観察する。 （Ⅱ-⑧） WBへの書き込みに注目し、練り上げの状況を確認する。
5	プランの完成と提案	・ 「プラン」を発表し、評価と改善を加える。 ・ 地方自治において自分にできることについて考え、まとめる。 ・ 次時の具体的な提案に向けて、提案先の選定と準備を進める。	・ 「プラン」を掲示し、全員の意見に触れさせる。 ・ 他人事とせず、自らの行動プランの具体化と提案先の整合性を考えさせる。	（Ⅱ-⑨） いくつかのプランを取り上げ、提案の新規性や可能性を確認する。 （Ⅳ-⑩） ワークシートへの書き込み状況を確認する。

6 本時の実際（4/5）

（1）主 題

鹿児島市の住み^{こな}熟しを考える ―持続可能な社会としての鹿児島市を指向して―

（2）本時の目標

- ① 活性化に関する自分たちのプランの概要について、他のグループの意見やアドバイスをもとに、意欲的に改善を図ろうとすることができる。
- ② 専門家に直接意見を聞きながら、プランに欠けている具体策等を検討することができる。
- ③ プランをまとめる過程で、その内容に応じた適切な提案先を検討することができる。

（3）本時の指導にあたって

本時は中項目「地方の政治と自治」の4時間目である。これまでに地方自治に関する基本的な内容を知識として理解した上で、現在進行中の鹿児島市の再開発を取り上げその概要を捉えると共に、日常生活で感じている、鹿児島市の地域としての魅力や将来性、住みにくさや課題等に目を向けながら、このことに関する自らの意見を持てるよう学習活動を展開してきた。

本時は、地方自治に関する既習事項と「鹿児島市の再開発」に関する議論を通して得た認識や判断力を背景に、より身近な問題として、鹿児島市の持続可能な活性化プランづくりをテーマに学習活動を展開していきたい。市内の地域社会の持つ課題から考えた以下の6つのカテゴリーの内、自らの住む地域の特性に沿ったテーマを追究させたい。

＜地域の課題から捉えた6つのカテゴリー案＞

- A 住み^{こな}熟しを年代別（現在、20年後、30年後、50年後）に捉えたコミュニティーを考える
- B 鹿児島市の周辺や市内の集合団地、繁華街周辺の空き屋の有効活用を考える
- C 市内、県外、インバウンド等の観光客のリピート率向上を考える
- D 市民や観光客が集い、憩える市街地高層ビルのコモンズ（共有場面）を考える
- E 家族資源（同居・近居・隣居）や地域資源（子ども・高齢者の見守り等）を考える
- F 大学や企業との連携を考える

また、単に生活経験からの提案にとどまらず、専門家にも直接意見をもらうことで、そのプランを深める機会とする。今回は、鹿児島市の再開発を契機とした学習活動である。もちろん、市の都市開発担当者の意見を聞くことも重要だが、授業者が考える地域開発の根幹をなす「持続可能な社会（Sustainable Society）・持続可能な開発（Sustainable Development）」を生徒の思考に反映させるべく、その専門家を招聘し、新たな示唆を与えたい。授業者を含め3人の専門家への質問をジグソー形式で行う。尚、メキシコのサステイナブル研究者と鹿児島県鹿屋市の柳谷公民館長には、Web会議システム（Zoom）での参加をお願いした。普段活用している教室の3面にそれぞれのゲストティーチャーを配置し、全体を俯瞰しながら授業が展開できるように、教室デザインにも配慮していく。

さて、メキシコからのゲストティーチャーである楠原氏は、以前はメキシコシティのUNAM（メキシコ国立自治大学）で専門の建築学の知見を生かし、メキシコの私有制大農園であるアシエンダ研究を進められ、授業者がメキシコ在住中に建築学など議論を交わした仲である。その後、地方の観光都市であるバジェ・デ・ブラボールの環境大学において、サステイナブル建築修士課程のディレクターとして活躍し、現在は世界遺産の都市であるオアハカの大学で、地域再生についての教鞭を執っている。今回の

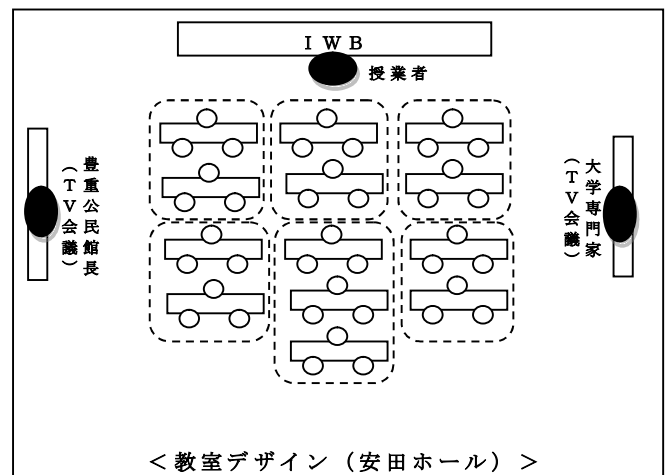
都市開発についても、日本とメキシコの両国の建築や都市研究、さらにサステナブル・デベロップメントで多くの示唆を与えて下さると考える。

また、鹿屋市柳谷集落の公民館長である豊重哲郎氏は、22年前に同集落の公民館長に就任し、その後、住民自治で自立した地域作りを念頭に、数々の優れた実践を行ってきた。授業では、この10数年来、地理的分野の過疎地の取り組みの一例として扱い、学習の大きな柱としてきた。今回の依頼についても、豊重館長自ら「やねだんの基本はサステナ

ブル。すなわち、持続可能な集落の維持。10年、30年先のU・Iターンの若返りの持てる文化と教育を中心とした地域力の向上」との返事を頂いた。まさに本研究の根幹をなす言葉である。二人の知見や実践が、生徒の思考に有機的な刺激を与え、さらに深い学びの機会になるものと考えます。

TV会議システムを活用した実践は、もうすでに15年以上続けている。1単位時間の授業で数万円の通信費や高価な機材費を投入した時代から、費用や設備を特別必要としない現在の環境になり、まさに、日々の実践に、支障なく使える教具になっている。これまでの実践は、同年代の生徒をつなぐ実践を主にしていたが、教材内容の進捗や認識レベルの違いから、戸惑いを感じることも多かった。最近では、その手軽さと通信品質の高さから、海外との実践に使うことも増えている。時差や生活環境の違いを実感させるには、有効な手段であると考えている。今回も生徒間の交流ではなく、専門家との交流の場面で活用する。特に最近の実践では、歯舞群島の島民であった戦争体験者との交流に大きな意義を感じた。高齢者等の移動時における負担軽減は、今後のこのような実践において、大きな意義を持つものと考えている。今後、社会科教育において、TV会議システムの活用は大重要な教具、授業方法の一つとして積極的に取り入れていくべきであると考えている。

このような取り組みを通して、地域の一人としての自分、住民自治の主役としての自分の存在を再認識させ、地域の活性化に自分の効力感を見出させる機会としたい。また、政治に参加をするということは決して難しいことではなく、自らの生活に関する諸事象に興味や疑問を持ち、まずできることから行動を始めることであることに気づかせたい。さらに一歩進めて、自らのプランが、実際にどのように価値を持つものになり得るのかも実感させることで、政治への関心がさらに高まり、主権者としての能動的な行動に繋がるものと考えます。



(4) 本時の展開

過程	学 習 活 動	形態	指 導 上 の 留 意 点	評価
導入 7'	1 既習の鹿児島市の再開発に関する質問に答える。	班	1 「五次総合計画」や「サステイナブル」等、本時の学習課題につながる発問をする。	△理解 (質問)
	2 本時の学習課題を確認する。 〈学習課題〉 鹿児島市の「住み熟し」をどう実現すべきだろうか。	一斉	2 改めて自らが考える地域の活性化、持続可能性の追求を目標として行くことを確認する。また、評価の観点と規準についても理解させる。	○関心意欲 (観察)
	3 みんなの考えているプランを知る。	一斉	3 現時点での生徒のプランを公表するが、問題点の指摘を急がず、カテゴリーに応じた柔軟な思考をするよう促す。	
	4 今日のゲストティーチャーに対して挨拶をする。	一斉	4 TV会議システムを通してあいさつをさせる。	
展開 37'	5 以下のカテゴリー別に、質問内容や相手を確認する。(案) A 年代別住み熟し B 空き屋活用 C 観光客リピーター D 市街ビル活用 E 家族・地域資源 F 産学地連携	一斉	5 各グループの内容をWBで確認した上で、簡単に視点を示しながら、質問のアドバイスを行う。	◎表現技法 (観察・相互評価)
	6 3つの質問ブースの位置づけを確認し、各グループの代表が質問に行く。	ジグソ	6 3つの質問ブースを以下のように位置づけ、各代表が質問する内容について、事前に概要を確認した上で、受け身にならないよう指示する。 ① 教師 ② サステイナブル研究者(†) ③ 豊重公民館長(†)	◎思考判断 (観察添削) (†)はTV会議使用
	7 質問内容を班に持ち帰り、自分たちのプランを練り上げる。	班	7 アドバイスを単に受け入れるだけでなく、批判的な思考と創造性を持って改善にあたらせる。	○関心意欲 (観察)
	8 班内で出た新たな疑問について、改めてブースに質問に行く。	ジグソ	8 プランをさらに具体的で、提案性のあるものに仕上げさせるべく、各班で議論を深めさせる。	
	9 改善された案をWBに書き、概要を簡単に説明する。	班	9 IWBを活用しながら、視覚的に共有しやすくなるように支援する。	
	10 ゲストティーチャーの意見を聞く。	一斉	10 ゲストティーチャーにアドバイスを頂く。単にプランの評価だけでなく、持続可能性や人材活用等の視点を組み入れつつ、次時の提案につなげられる内容になるよう配慮をお願いする。	TV会議使用
	11 ゲストティーチャーのアドバイスを受け、次時に向けて内容の確認と提案先の検討を行う。	班	11 ゲストティーチャーのアドバイスの要点を押さえながら、活動が深まらないグループの支援に当たる。	◎思考判断 (観察添削)
	12 先生の話聞く。	一斉	12 持続可能な町づくりについての教師の考えを聞くと共に、ゲストへの謝意を示す。	◎全体評価 WBでの共有による提示
	13 次時の内容の確認をする。	一斉	13 次時で「プラン」を最終確認し提案していくことで、政治分野のまとめをすることを説明する。	
終末 6'				

(5) 本時の評価

- ① 活性化に関する自分たちのプランの概要について、他のグループの意見やアドバイスをもとに、意欲的に改善を図ろうとすることができたか。
- ② 専門家に直接意見を聞きながら、プランに欠けている具体策等を検討することができたか。
- ③ プランをまとめる過程で、その内容に応じた適切な提案先を検討することができたか。